

A. ハルムとH. シェンカーの旋律線概念とその分析実践

西田紘子

本稿は、アウグスト・ハルム（August Halm, 1869-1929）とハインリヒ・シェンカー（Heinrich Schenker, 1868-1935）が交わした書簡及び双方の出版物等における相手への言及箇所を手がかりに、彼らの旋律線に関する概念とその分析実践を比較考察することを目的とする。ハルムとシェンカーはR. シェフケ（Rudolf Schäfke, 1934）によってエネルギー学派の創始者とされているが、両者のアプローチは対極化されてきた（Lee Rothfarb 2005）。本稿は、ハルムのリーニエとシェンカーのウアリーニエを対照させたR. ケーラー（Rafael Köhler, 1996）の論考を批判しつつ、両者の旋律線の概念をハルムのリーニエとシェンカーのウアリーニエという用語のみに限定せず、彼らの思想展開を追いながら考察する。

ハルムとシェンカーは旋律を「根源的なもの」——音階進行——の細分化とみなし、ハルムはこの根源的なものを1910年代に音階として概念化し、シェンカーは1920年代に入ってウアリーニエと命名した。その点で両者には法則への還元的思考が見出せる。一方でハルムの旋律論は旋律線への還元だけには限られず、ハルムはシェンカーのウアリーニエ分析を批判している。この批判は、ハルムとシェンカーが線的分析を行う目的の相違に起因するだろう。ハルムにとってソナタの両主題の対照性は線的分析によっては証明されないが、それでもハルムが線的分析を実践し続けたのは、これがフーガにおける主題の線的「同一性」を示し得る点で、作品の統一性という美的理念にとって有効な方法であったからであると推論される。他方でシェンカーは、1910年代にはハルムと同様に作品の統一性を主題の線的同一性に見ていたが、1920年代には楽曲中の旋律全体の線的「持続性」を作品の統一性の証左として捉えようとするのである。

両者の旋律線概念とその実践の間に広がる相違は、作品の「一部」である主題旋律の変奏技法を中心に考えていたハルムと、作品「全体」が一つの原形を装飾変奏したものであるとみなしたシェンカーの、変奏観の違いに由来すると結論づけられる。